



## ●色彩教材研究会の文化とは？

1月18日（土）に、色彩教材研究会の幹事会がありました。新年会を兼ねて食事を楽しみながら、様々な話題についておしゃべりしました。主査は、みんなの声に耳を傾けながら「色彩教材研究会って何だろう？」とぼんやり考えていました。

「誰かに色彩教材の作り方を教わりその色彩教材を入手して満足」、これはカルチャー教室のようだと感じました。それでは色彩教材研究会とは何なのか？

「自らオリジナルを創り出し、仲間同士で共有して新しい視点や知見を得てブラッシュアップする。それによって学会発表、作品展示、論文などに繋がり、日本国内だけでなく海外にも広がる。」その一連が“Color Playing!”として色彩教材研究会の文化として定着すればと、締めのリんごシャーベットを頂きながら考えていました。

3月1日開催の“第1回色彩教材ギャラリートーク”では、オリジナルの色彩教材の作品や研究をギャラリー化して、参加者で共有し多くの気づきを得られる場になりたいと考えております。近日詳細を展開させていただきますので、しばしお待ちいただけますと幸いです。（吉澤陽介 主査より：027）

## ●366日ヨーロッパの伝統色図鑑・こぼれ話 1

No.421号（12/19付）で上記新刊を取り上げていただいた書籍に入りきらなかった内容の一部を「こぼれ話」として紹介したい。

「セラドン・グリーン」(Celadon Green)は中国磁器の「青磁」のくすんだ青緑色や灰緑色である。青磁を含む中国の陶磁器は9世紀頃より海路で西アジアや中東へ運ばれ一部はヨーロッパにも流入していたが、16世紀以降本格的にヨーロッパに直接もたらされるようになった。この色名の由来には、青磁を贈答に用いた12世紀エジプト君主“サラディン”の名、サンスクリット語で“緑の石”を意味する言葉、ギリシャを流れる緑の川の名、と諸説あるが、17世紀初めフランスで大評判となったデュルフェ作の長大な牧歌的恋愛小説「アストレ」の上演時に淡い緑色の舞台衣裳を着ていた主人公の牧童の青年“セラドン”が有力な説で、フランス他の百科事典にも採用されている。

東洋の幽玄の美を秘めた青磁やその色みがヨーロッパでは牧歌的口マンズの登場人物の名で呼ばれることになったわけだが、ひたすらに純愛を貫く恋人達のこの物語は当時の人々の感受性や恋愛論にそれだけ多大な影響を与えたということなのだろう。（荘 真木子）

## ●この通信に原稿執筆のお願い

2025年を迎え、私は数え年で八十九歳を迎えました。後しばらくこの通信を継続するために、皆様から掲載原稿を、切れ目なく送っていただくことが必須です。

この通信は、色彩教育に役立つ内容を掲載することが目的ですので、ご協力ください。

「私の好きな色」、「私の好きな配色」がとりあえずのテーマです。

着衣や身の回りの道具の色、食べ物の色、花や虫の色、建物の色、屋根の色、車の色や、電車の色など身の回りに色は溢れています。髪の色や、口紅の色などは、化粧品メーカーにとって貴重な情報となるでしょう。

色別販売統計はメーカーが集計している外には出ないデータですが、ここでは、学会員が、直感的、あるいは象徴的に感じている情報が欲しいのです。

色彩学的な見地から、調査をしておられる方は、是非、概要を原稿にまとめるとともに将来、研究発表としてまとめてください。

この通信の原稿としては、表題が15字以内、本文が480字以内。署名は、本名、ペンネームのどちらでも結構です。

また、写真を使いたい場合は、字数を減らし一枚だけお使いください。（永田泰弘）